

ため息が止まらない

－石井妙子著『女帝 小池百合子』（文藝春秋、2020年）を読む

盛田 常夫

小池百合子に関心があるわけではないが、以前から「カイロ大学首席卒業」という経歴だけは知っていた。すごい人がいると思った。外国の大学を、しかも超難解な言語で知られるアラビア語の大学を最短の4年で首席卒業というのは並大抵の努力で達成できるものではない。ところが、その学歴が詐称ではないかというニュースがたびたびメディアに流れるようになり、否応なしにその問題に関心が向いた。

一時期、小池と恋人関係にあった舛添要一によれば、彼もまたすごい経歴だと驚いた一人のようだが、本人に確かめると「卒業生は一人だけだから首席なのよ」とあっけらかんとして答えたという。舛添は40年間だまされ続けていたというが、当の小池には学歴詐称とか、騙したという感覚はないようだ。小池にとって、経歴や人脈は自らをステップアップする踏み台に過ぎず、ステップアップした後はどうでも良いものなのだ。この行動様式ほど、小池百合子の特徴づけるものはない。

この種の経歴トリックはよくあることで、古関裕而氏の国際作曲家コンクール2位入賞も、5名しか応募がなく全員が2位だった。6人しかエントリーしなかったスポーツ種目で、6位入賞と表現するか最下位と表現するかで、人々の印象は異なる。しかし、そうした印象操作が人生の岐路を決めることがある。世の中不思議なものである。小池の場合も、アラブ世界の名門カイロ大学首席卒業が売り文句で、アラビア語が堪能という触れ込みにマスコミが飛びついた。実像からかけ離れた虚像が独り歩きし、小池の人生が上向きに展開しだした。この本を読むと、学歴だけでなく、小池が発する言動のほとんどが事実を作り変えたもので、自分を売り込んだり、印象付けたりする天才的な才能を持っていることが分かる。何とも驚くばかりで、ため息が止まらない。

首席卒業だけが作り話ならまだ可愛いが、卒業そのものが疑問視されている。小池のカイロ時代に2年間、小池と同居した女性が、意を決して、「文藝春秋」誌に小池の学歴問題を寄稿した石井氏に手紙を書いた。それが本書執筆の始まりだった。少なくとも、同居中の2年間、この女性が見て感じたことは、小池が各種メディアに得々と話す内容とはまったく異なっていたからだ。虚飾の人生を送ってきた小池が、さらに嘘に嘘を重ねて日本の政治を左右するほどまでに成り上がることに、止めようもない不安を覚えたからだ。小池の出自を知る女性である。小池もすべてを知るこの女性のことは他言してこなかった。ただ、すでにアラブ世界の政治家とのつながりをもつ小池を敵に回すことは、自らの生命にかかわることにもなりかねない。アラブ世界の人の命は安い。政治家や体制を批判するこ

とは命がけだ。だから、この女性は仮名で登場し、石井氏はほかのメディアにこの女性の居場所を明らかにしていない。それはこの同居女性が石井氏に念押しで約束してもらったことだ。

小池は芦屋出身だが、いわゆる良家の子女ではない。逆に、大ほら吹きで詐欺まがいの父親の商売の失敗で貧困な少女時代を過ごしている。にもかかわらず、親の面子でお嬢様学校に入れられた。その時のコンプレックスが小池を駆り立てる力になった。本当は英語圏やフランス語圏で勉強したかった。しかし、そこで競うのは厳しい。そこで思いついたのが、競争相手がいないアラビア語圏への留学だった。その判断は間違っていなかった。ただ、日本でアラビア語を勉強したことがない学生にとって、入学することも卒業することも、並大抵の努力では済まない。彼女にその覚悟はなかったが、父親のコネを使えば何とかなるといふ安易な思いがあった。アラビア語専攻なのに、小池がやたら英単語を使うのは、英語圏に留学できなかった悔しさの裏返しでもある。彼女にとって、中学生レベルの英語でも、アラビア語よりは話しやすいのだろうと思う。アラブ人との会話では英語とアラビア語がちゃんぽんになる事実が、それを物語っている。

詐欺師的な商売で敵を作る父を疎みながら、中東世界に何とかうまい商売を見つけようとエジプト人脈に食い入ろうとする父親を頼って、小池はカイロ大学に編入学した。この時、1972年10月の新年度入学が許可されず、イギリスへ短期留学するなどして、「大丈夫、お父さんとドクター・ハーテムに任せてあるから」と他人任せだった。コネを使った編入は1973年10月に実現した。その間、日本人学生と結婚したり、国外旅行をしたりで、まともに勉強していない。それから3年後に、カイロ大学を卒業したことになっている。初級アラビア語の学習で右往左往している学生が。

同居人によれば小池が勉強しているところを見たことがないという。毎晩日本人の若い男が次から次へと訪ねてきて遊びほうけ、アルバイトに出かけては家を空け、何時勉強しているか分からない状態だった。学業を心配する同居人に、何とかなるわよという調子だった。簡単に入学できたのだから、卒業も難しくないと考えていたのだろう。入学も卒業も、自分の実力で勝ち取るということを考えたことはないようだ。

普通なら、コネで入学したら恥じるものだが、小池には恥じるという意識はない。せめて死に物狂いで勉強して、実力で卒業しようという気持ちもなかった。お客さんのように大学に通い、4年経過すれば、父親が卒業証明書を出すように手配してくれるのは簡単だと考えていたのだろう。一種の政治枠のようなコネ入学だから、そのような学生をコネ卒業させるのはアラブ世界では日常茶飯なのだろう。アラブ圏でない日本から来た女性、しかもコネで入学した学生は「お客さん」で、ふつうの学生ではない。何か将来、大学やエジプトのために役立ってくれるなら、卒業証明書の1枚や2枚仕上げることなど、朝飯前の仕事である。もっとも、カイロ大学の事務能力は低く、1枚の証明書を得るのに何か月もの時間が必要のようだ。まして、「お客さん」学生の入学成績記録や成績証明書など、たぶん、

大学のどこを探してもないだろう。だから、カイロ大学を本当に卒業しているかという議論は最初から成り立たない。

さらに、同居人の証言によれば、父親はカイロに来る度に、見栄を張ってヒルトンホテルに滞在するのが常だったが、小池はホテルから戻ってくる度に、ある物を持参したという。包みの中には、驚くことに、ヒルトンホテルのナイフ、フォークやシュガーポットが入っていたという。包みはヒルトンのテーブルクロスだった。こういうところに、育ちが現れる。この親子、父も父なら、娘も娘。同類なのだ。

アラビア語の専門家によれば、小池が話すアラビア語は中学 1 年生程度だという。さすがに 5 年間もアラブ世界に住んでいたのだから、それなりの日常会話はできるだろう。しかし、それは語学能力の 1 割程度のこと。話すことができても、読み書きができない人を語学ができる人とは言わない。当該社会に長く住めば、多かれ少なかれ、話す能力は獲得される。しかし、読み書きの能力の獲得には長期の学習が不可欠である。

実際、同居女性が垣間見た小池のノートから分かったことは、小池はアラビア語を文法的に理解するのではなく、絵のように文字列を丸暗記して試験に臨んだようだ。予想される質問の答えを丸覚えするというやり方である。当座のテストには間に合っても、このようなやり方で語学を習得することはできない。難解な言語を我が物にするためには、日々、長時間の勉強を何年も続けなければならない。そういう苦勞をせずに、学生時代を過ごした小池には、学ぶという考え方はなかったのだろう。とにかくアラビア語で日常会話ができ、大学卒業証書が得られればそれでよかった。卒業したか否かを議論するまでもなく、ほとんど勉強していない。小池にとって、肩書が第一で、その肩書がどのように得られたかは問題ではない。

不真面目な人生のように見えるが、小池はとにかく外見を良く見せるために、尋常でない努力を払っている。父親譲りの口八丁手八丁のコミュ力、事実を作り変えるほら吹き能力や自分を着飾るという点で、特異な才能を発揮した。

テレビキャスター・アシスタントから政治家へ転身した後の小池は、並み居る「爺さん」政治家を次から次へと手なずけた。見事というしかない。あの気難しい小沢一郎を壇上に押し上げて一緒に「瀬戸の花嫁」をデュエットし、真っ赤になって照れる小沢のネクタイを直したり髪を直したりすれば、イチコロである（1994 年 9 月、山口敏夫の長男の結婚披露宴）。この「爺殺し」の罠に嵌った政治家は一人や二人ではない。自分がステップアップできないと分かるや否や、さっさと「爺さん」を捨て、次の「爺さん」になびいていく。だから、政界では「権力と寝る女」と囁かれている（第 4 章 政界のチアリーダー）。それにしても、爺さん政治家連中は、若い女性には情けないほど弱い。男世界で生きてきたから、女性を見る目がないのだろうか。

昔の同僚の田嶋陽子がうまいことを言っている。「小池さんは女の皮はかぶっているけれ

ども、中身は男性だと思う」、「フェミニズムの世界では『父の娘』というんですよね。父親に可愛がられて育った娘に多い。父親の持つ男性の価値観をそのまま受け入れてしまうので彼女たちは、女性だけれど女性蔑視の女性になる。男性の中で名誉白人的に、紅一点でいることを好む。だから女性かといえば女性だけれど、内面は男性化されている」(第4章 政界のチアリーダー)。女性があまり進出していない世界で、上昇志向が強い女性が持っている典型的な気質である。男の心を見透かすマダムのような。心にもないお世辞で相手をコロッと騙し、後ろを向いて舌を出している。

防衛大臣に任命された時のことだ。「当日、小池は二度も服を着替えた。白のスーツで官邸に行き、濃紺のドレスに着替えて皇居に伺い、黒のパンツスーツで防衛省へと向かった。後、スポーツ紙では『二度のお色直し』と、からかわれた」(第5章 大臣の椅子)。それほどまでに、小池は外見に拘った。防衛政策の理念や中身より、いかに自分を引き立たせるかが最大の関心事なのである。

これほどまでに外見に拘るのに、自分の利益にならないことには非情な態度をとる。阪神淡路大震災後からだいぶ経った1996年、芦屋の女性たちが小池に陳情するために議員会館を訪ねた時のことだ。

「窮状を必死に訴える彼女たちに対して、小池は指にマニキュアを塗りながら応じた。一度として顔を上げることがなかった。女性たちは、小池のこの態度に驚きながらも、何とか味方になってもらおうと言葉を重ねた。ところが、小池はすべての指にマニキュアを塗り終わると指先に息を吹きかけ、こう告げたという。『もうマニキュア、塗り終わったから帰ってくれますか？私、選挙区変わったし』」(第4章 政界のチアリーダー)。

小池はもうこの時のことを覚えていないだろうが、このような仕打ちを受けた人々は一生忘れることはない。上昇志向が強い人は、踏み台にして捨て去った人々の心情を押し量ることはできない。小池には人としての優しさや、自身を律する倫理的規範がない。小池に心を許せる伴侶や頼りになる友人、助言者がほとんどいない理由である。彼女の本性が分かった人は、次々と離れていくからである。

本書を読みながら感じたことだが、政治家の多くは小池のような虚飾の人生を生きた人たちでないかということだ。安倍晋三にしても麻生太郎にしても、履歴を粉飾するために、カリフォルニア大学政治学科卒業やらロンドン経済大学卒業やら、適当に履歴に書いていた。世間の目が厳しくなって、すぐに虚偽の履歴を消したが、この種の政治家はこの二人だけではないはずだ。大学の卒業証明書があっても、大学で何も学んでいない政治家も多い。官房長官などは法政大学法学部(夜間)を卒業したことになっているが、大学紛争の最中で授業も試験もおざなりで卒業できたはずだ。大学紛争時代は多くの大学で授業に出席しなくても卒業できた。しかも、苦学生だったから、授業に出席するよりアルバイトに忙しかっただろう。当時の大学二部(夜間)の卒業証書を得るのは小池が証明書を得るよ

りはるかに簡単だっただろう。卒業からほどなくして、政治家の書生になった人物である。政治家としての理念などあろうはずがない。ただの政治屋である。

こういう人々が一国の宰相候補に祭り上げられる日本社会はいったい何なのだろう。この事実にも深いため息をつかざるを得ない。大ボラを吹く詐欺師か、世話になった人々を足場にステイタスを上げることだけに執着する特異な性格を持っている人たちだけが、政治の頂点に立てるのだろうか。少なくとも、日本の将来に役立つ人々でないこと確かである。中学生レベルでも、英語やアラビア語を話せる人は多くない。横文字を並べれば、多数の平民が自分を崇めるだろうと考える。政治屋の平均的知性が国民の平均値を上回っている限り、国民は人気投票で政治家を決める。政治家の資質の向上は期待できない。理念なき政治が続く所以である。ため息が止まらない。